

やま ちよう
山 本 町

目に効く弘法の井戸水

平安時代中期・康保四（九六七）年の東大寺関係文書に、初めて「高市郡―山本庄」が登場します。そのあと鎌倉時代中期・寛元三（一二四五）年の天理図書館所蔵文書に興福寺「西金堂領忌部・山本両庄」とありますので、この間に領有者が東大寺から興福寺に移転していたこととなります。

時代がさらに下った室町時代の後期には、土地の豪族・越智氏がこの一角を支配していた旨の古い記録が残っています。従って平安時代から幾多の変遷を遂げながらも、当地が連綿として生き続けていたことが分かります。

江戸時代以降に山本村と呼ばれた当地は、明治二三年に白檀村の大字となり、昭和三年から畝傍町の大字になったあと、同三一年の檀原市発足に伴い山本町となりました。ちなみに昭和一七年ごろ町は、米・裸麦・小豆・綿実・葉煙草などが主産物の農村（農産物取調帳）でした。

同町にある真言宗・太子堂の境内に「井谷の井」という井戸があります。この井戸は弘法大師が掘ったと伝えられ、井戸水が目などの病に効くとして、古くから薬用に使われてきたようです。